
逆神の深夜

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆神の深夜

【Nコード】

N9157F

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

時は現代。両親を早くになくし、フリーターとして日々の生活をする少年、坂上進也はある日一人の少女と知り合う。少女、朱鷺守七葉は魔術の世界に身を置きながらも魔術をつかえない苦しみを持っていた。そして、少女が狙われていることを知った進也は彼女を何とかして助け出そうとする。現代魔術師達の物語。

プロローグ 零時間前

プロローグ 零時間前

夕暮れの太陽が世界を紅に染め上げていた。吹きすさぶ海風は潮の香りと共に冷涼な空気を陸へと運び、男が身につけるローブを靡かせていた。

「これで全てが解決する。ご苦労だったな」

その男が手荷物ものは身に付ける漆黒の衣服とは対照的な、銀に光る装飾銃だった。

「デメエ、何をするつもりだ」

少年は、がたがたに震える足をむち打ち男とにらみつける。その銃口が目指す先には、既に意識を失い地に臥す少女。少年が守ろうとした少女だった。

「お前は動くな」

男の口調は懇願ではなく命令だった。そして、その言葉は少年の心の芯に深く突き刺さる。

「結局、あんたの目的はこれだったわけか」

「そういうことだ」

男の指が、その引き金に添えられた指が次第に引き絞られていく。少年はまぶたを閉ざし、胸を押さえ、走り出した。

硬い何かを殴りつける乾いた銃声と共に少年は全ての力を失い倒れ込んだ。

「馬鹿野郎が！」

男は、赤に染まり上がっていく彼を見下ろし、ただその一言を呟いた。

第一章 七十二時間前

第一章 〓七十二時間前〓

コーナーで突き放すそうとしても昨日の夜更かしが身に祟り上手くパワーを上げられない。

「くっそ！ こんなことなら深夜番組なんて見なけりゃよかったぜ」
いつもより疲労の激しい太ももにむち打ち、坂上進也はただひたすらにペダルを踏みつける。

風切り音と共に疾走する電信柱やブロック塀。朝も早く冷え冷えとした空気が頬を殴りつけ、次第に上がっていく息がまるで機関車の上げる蒸気のように耳朵の先へと流れていく。

彼の耳を打つ二つのジャリツとした音。自転車のチェーンとスプロケットが擦りあわされる音が足下と少しばかり後方から響いてくる。ミラーの付いていない自転車ではそれを伺うためには身体をひねるしかない。しかし、この状態ではそれが致命的なスピードダウンになることは目に見えている。

「（だいたい後五車身ほどか。少しやべえな）」

彼はその音から、後続車との距離にだいたいの当たりをつけ、目と鼻の先に迫った曲がり角を前にして慌ただしくブレーキを握りこみ、ギアを二段下げると同時に身体を大きく左側へと倒した。

まるで、角になった電信柱の表面を滑るように身を躍り出す車体に進也は小さく舌打ちをした。

「タイヤが減って滑る、サスも甘い。最近セッティングをさぼってたからだ！」

コーナリングで蓄積したスプリングのエネルギーを思うように開放できなかったことに憤慨し、進也はギアチェンジを怠るというミスをしてかしてしまった。声を出すのは肺活の妨げになることは重々承知していたが、それでも進也は文句を言わなければ済まなかつ

た。

コーナリングで視界の隅に移った後ろの影からして、その距離はおよそ二車身程までに縮まっているように感じられる。

「コーナーで詰められるなんてことなかったのに。最悪だぜ！」
目的^{ゴール}地まで残すところ一〇〇メートル弱にまで迫っている。ここからはただ長いストレートがあるだけで、必要になるのは力強い踏み込みとそれを持続できるだけの体力。寝不足の今ではそのどちらも欠けているが、それでも負けたくないという意気込みだけは誰よりも強いはずだ。

二の腕と脇の間から相手の前輪が見え始めてきた。既にその息づかいさえも聞こえるほど距離は詰まっている。どうしようもなく荒い自分の呼吸に比べ、そいつの呼吸は随分と安定して聞こえる。「雑念は捨てる！ 坂上進也！ 勝て、今はそれだけでいい！」
道は平坦に見えて若干の下り勾配がついている。その分、車体が減速することはないが、勝手に加速するために時折ペダルの速度がたらずに空回りが発生してしまう。本当なら下り坂用のギアが欲しいところだが、金欠気味の進也にはそれは夢でしかない。結局、空回りするペダルを踏みしめてさらなる加速に持つて行くしかないのだ。

後20メートル。相手の前輪が彼の身体と並んだ。速度の伸びは相手の方が上手だ。今まではそれをコーナーで稼いできていたが、どうやらそれも今日までのようらしい。

止まることを考えていられない。ゴールの先は、国道の大通りだが、今は車が来ていないことを祈るばかりだ。

「に・げ・き・れ・えーーーーー！！！」

チェーンも切れよといわんばかりに最後の最後の力を振りしぼり、進也はただその先にある勝利を信じてゴールのライン（横断歩道）を駆け抜けた。

車輪の差。それだけ自分の方が前に出ていた。

正当なジャッジもおらず、あくまでセルフジャッジメントである

この草レースだが、この二人は今まで判定で争ったことはない。

進也は一二回目の勝利を確信し、真っ青になった。

「ど・ど・ど……どけ……!!」

停車を考えないその見事のスパートの結果に残されたのは、誰からの賞賛も受けない勝利と、目前に迫る車の影だった。

進也はただ無意識に、握力の許す限り全力でブレーキを握りこんだ。

ゴムの焼ける匂いが鼻孔をくすぐり、タイヤが地面を擦り付ける甲高い音が耳朵を突き抜ける。前輪と後輪の制動差が横向きの力へと変換され、その恩恵にあずかれない進也の身体はニュートン力学の運動の第一法則に正しく従い、ただ無情に真っ正面へと飛翔していく。

「このまま空を飛び続ければ、気持ちいいだろうなあ」

翼を持たない人間は、ただ目にしみるほど透き通った青空を見上げることでしかできなかった。大昔の人間は大空を己のものとする鳥達を見て、どれだけ羨んだことだろうか。

翼を持つ者達であれば、そのまま羽ばたき気の向くままに飛んでいくことができただろう。

しかし、進也に残された未来はただ重力の束縛のままに自由落下をするだけのことだった。

「全然、自由じゃねえ……!!」

停車中の軽自動車を飛び越え、彼はそのまま道路の向こう岸へと墜落した。

「やあ、身体は大丈夫かい？」

コンビニの更衣室のドアを開いた進也に、中年の男性が気さくに声をかけた。

「おはようございます、綱義さん。身体の方は、まあ、平気です。頑丈ですから」

身体のあちこちに絆創膏を貼り付けながら、進也はそう言って自

分の名札が付いたロッカーを開き荷物を入れた。

「頑丈なのはいいことだね。うちの息子など外で遊ばないでゲームばかりしているから。腕なんてこんなに細くてね」

綱義と呼ばれた男性は、そう微笑みながら読んでいた新聞を丸めて自分の息子がどれだけ華奢かを示した。

「そんなに細かったら折れちゃいますって」

進也は笑いながらロッカーの中にかけてる制服を取り出し、着替え始めた。

綱義はそんな彼にかまわず、にこやかな笑みを浮かべながら最近の息子はどうか、口が悪くなってきたとか、反抗期なのかなとか喋りながらさんざん親ばかりを垂れ流していた。

いつものことだと思いながらゆっくりと制服を着ながら、進也ははいはい、そうですねと相づちを打つ。

高校生と同じ年代である進也にとっては子供を持つと言うことが全く想像できない。いや、彼女でもいれば話は別なのだろうが、残念ながら彼は特定の彼女を持った試しがなかった。

「それにしても、君も大変だね。その年で親御さんがお亡くなりになって、自分で稼がないといけないんだろう？」

綱義がふと漏らした言葉に、進也の手が止まった。

「ええ、まあ。大変だと思いますけど、今はちゃんと生活できてますから」

進也の、どこか無機質な口調に綱義は失言を恥じた。

「ご、ごめん。」

綱義のそんな不器用な謝り方に進也は少し頬をゆるませると、最後のボタンをしっかりと留めて振り向いた。

「いいですよ。この環境にも慣れましたから」

嘘の笑顔を浮かべるのに慣れてしまった。

「綱義さん、進也君。そろそろお願いします」

扉の向こうから顔をのぞかせた店長に答え、二人はまるで戦場に赴く戦士のように肩をたたき合って互いの健闘を祈った。

「（そうさ。悩んだり落ち込んだりしても無駄なんだ。今は生きることだけを考えていればいい）」

夜勤明けで眠そうに通路を歩く大学生と交替の挨拶を交わし、進也は変わってしまった日常へと足を踏み込んでいった。

「進也君、今日はもう上がりだろう？一緒に夕食でも行かないかい」朝とは別の大学生が交替に訪れた時を見計らって綱義が進也を誘った。

綱義は昼食後はずっとバックヤードに籠もり在庫のチェックをしていたらしい。そんな彼は、これから夜勤があるのだが、店長から一時間ほど外に出てもいいと言われて食事に行くところだったらしい。

実のところ、進也は後一時間ほどで賞味期限の切れる弁当をもらっており、今晚の食事には困っていなかったのだが、それでも外食に対して心が揺さぶられた。

進也は少し言葉を濁して考えたが、結局断ることとした。

おそらく綱義は、年下に払わせるのは年長者のプライドが許さないなどと言って彼の分も出そうとするだろう。

正直なところ、彼にとつてそれは願ってもないことなのだが、それでも綱義の家庭の事情を鑑みると彼だけに負担させることは忍びなかった。

綱義は残念そうに口調を下げるが、進也が今度の休日にもどこかに食べに行きましようと言うと打って変わって表情を明るくさせた。

「絶対。約束だよ」

と、まるで小学生同士の口約束のように交わされるそれを聞きな

がら進也は表情をゆるめ、綱義と店長、他の同僚に挨拶を交わし家路についた。

国道沿いに大きな駐車場を持つこのコンビニは、深夜には若者のたまり場になるらしかった。進也の住まうアパートはここより少し離れた静かなところに位置しているので、深夜の喧噪からは無縁だったが、時々その若者達が起こすトラブルでコンビニに警察が入ることがあると聞いてからは無縁とも言えなくなった。

進也もコンビニのバイトを始める時に、そういった一通りの防犯対策について聞かされていたが、日中が主なシフトとなる彼はバックヤードに隠されている警棒やペイント弾を実際に使ったことはない。

年々人工が減りつつあるこの街は夜になると人の往来が殆ど無くなる。

ブロック塀の側に立てられた電信柱の電灯が、夜の闇に僅かな光の穴を穿ち、それが点々と続いている。それはまるで節足動物の足跡みたいだと進也は感じ、まるで自分がどうしようもなく小さな存在であるように感じて身震いを覚えた。

人生何が起こるかなんて、それが起こってしまわない限り知ることはできない。

一瞬で日常の全てが変わってしまったこの一年間を思い出し、進也は当てもなく夜空を見上げた。

街の放つ光に照らされ、本来ならそこにあるべき恒星の瞬きが今では薄ボンヤリとした赤いもやで覆い尽くされているように見える。いったい誰がこんな街を作り出したのか。

一人の人間を埋もれさせ、寄る辺のないものには容赦のない現実と非常な日常を与えるこの街は、いったい何者のためにここにあるのだろう。

やはり、朝の言葉がまだ尾を引いているようだなと進也は感じた。こんな、取り留めのないことを考えるのは大抵両親のことを思い出した時だ。

「帰って、飯喰って……。寝るか……。チャリのセッティングは明日だな。ああ、風呂にもはいらねえと。銭湯、まだあいてつかない。」

進也は夜空に向かってそう呟くと、サドルにまたがった腰を少し上げ勢いをつけてペダルを踏み込んだ。

盛りの付いた猫の鳴き声。月に向かって遠吠えを上げる犬の叫び。遠くからは電車が軌道を踏みしめる慌ただしい騒ぎが耳をざわめかせ、時折聞こえる車のクラクションは静寂であるはずの暗がりには酷く落ち着かない響きをもたらしていた。

その中にあっても人の足音が一つも聞こえてこない。どうして音にあふれたこの世界でこんなにも孤独を感じてしまうのか。

「やっぱり、誘いにのっておいたほうがよかったかな」

通り過ぎる家から聞こえる談笑の声と、暖かい料理の香りをどこか遠くに見つめながら進也はそう呟いた。進也の手は自然とズボンのポケットに入っていた携帯電話に伸ばされていた。

随分古いモデルで、既に電池の容量も殆ど限界に着ている。今朝充電をし終わっていたはずなのに今になっては既にその表示にはアラームが示されている。

その着信とメールの履歴を見ても、その先頭にあるものも既に一年以上前のものばかりだった。

世界なんてあつという間に変わる。少しばかりブレーキを遅くかけるだけでだ。

進也は何も言わない携帯電話を投げ捨てたくなる衝動に駆られるが、その手を押さえ元のポケットの位置に戻した。

進也は落ちてしまった視線を持ち上げ、前を見た。

少し先に移る四つ路の交差点の四隅の角に立てられた街灯、そしてその中心には一際濃い暗闇が身を潜めていた。

「……えっ……？」

進也はペダルから足を滑らせた。身を潜めていたのは暗闇ではなかった。いや、そもそも暗闇が身を潜めるなど、言葉が矛盾してい

る。それもそのはずだ、暗闇には本来”身”など存在するはずもなかったのだから。

「……クスッ……」

闇だと思っていたそれは、まるで身体の回りに闇を纏っているのかと勘違いしてしまいそうなほど漆黒に染まったドレスを纏った少女だった。

年の頃は10歳〜12歳といったところだろうか。月明かりに浮かぶ夜の海にも似た、深い青の髪はただまっすぐとその背中を覆い尽くし、起伏の少ないその幼い身体を覆い尽くす漆黒のドレスは煌びやかさとは無縁にも思える装飾が施されている。そのくせ、膝を隠す程に長くふわっと広がったスカートには星空の下にある草原のようなフリルが全体をくまなく覆い尽くしていた。

黒いタイツに被われた細い足の先には、まるで進也の手のひらほどの大きさ程の足が飾り気のないシンプルなローファーを纏っていた。

そうして彼女は、ようやく私に気づいたの？　と言いたげな笑みを頬に浮かべ、真円の月ののに似た瞳をまるで無遠慮に進也へと向ける続ける。

その黒い少女は、まるで圧倒的な時を生きて来たかのような妖艶さを隠すことなく、ただ両腕を腰の裏側に隠し、ただそこに立っていた。

そして、彼女は進也が声を上げる暇も与えずつま先でクルッとターンをすると背を向け歩き去っていった。

彼女の姿が道の向こう側へと消えていき、その姿が完全に闇とどうかしてしまふまで進也は息をすることすらできなかった。

夢だったのかもしれない。

近所の銭湯から帰り、土産代わりの瓶入りの珈琲牛乳を一気に咽に流し込んだ進也はようやく落ち着いた感情からその答えを導き出した。

六畳一間の畳敷きの部屋には、まるで粗大ゴミ置き場から拾ってきたかのような家具が並べられている。

既に万年床に化してしまっている布団を座布団代わりにして、その正面には円いちゃぶ台が時代を間違えたかのような様相で鎮座している。その向こうには部屋を隔てずしてカセットコンロにも似た安っぽいキッチンと流し台。すぐそばにはセキュリティなど度外視したような扉がそびえている。

進也は飲み終えた空き瓶をすぐこともせずになやぶ台に置き、そのままごろっと布団に寝転がった。

「こんな日はとつと寝ちまうのが一番だな」

天上からぶら下げられた丸蛍光灯が風もないのにゆらゆらと揺れている。まともな暖房器具も用意されていない部屋は時折酷く冷たいすきま風が入るが、分厚い布団をかぶることでそれも幾分かましになる。

行きがけに干しておいた布団からはごわごわとした感触と共に太陽の光を浴びた一種独特な香りが漂い、それは何故か彼にとっては眠気を後押しするように感じられた。

寝転がってもスイッチを切り替えられるように伸ばされた蛍光灯の紐を引くと、部屋の中は外と同じ暗闇に満たされた。

「そっついや、夕飯喰ってねえな」

次第にボンヤリとしてくる脳裏には帰った早々冷蔵庫にたたき込んだ、とつくの二時間前に賞味期限が切れた弁当のことが浮かび上がった。

「まあ、いいか。明日の朝までは保つな。んで、朝飯は…あれで…昼は……」

何も変わり映えしない。世界なんて簡単に変わってしまうことは身に浸みて分かっていることだが、それでも繰り返される日常は早々変わることはない。

おそらく、彼の明日には今日とは変わらない日常が待ち受けており、彼に残された運命はただそれに埋没することだけだ。

眠気と共に深いため息を吐き出し、重いまぶたを閉じ、呼吸を整え、彼の意識は眠りへと落ちていった。

『世界は小さなきっかけだけで簡単に変化する』彼のその信仰は正しかった。彼のその先に待っているのは埋没すべき日常ではなく、彼の全てを否定してしまう非日常であることを彼はまだ知らない。

そうして、彼の物語は彼のあずかり知らない場所で静かに幕が開かれていった。

第二章 四十九時間前

「四十九時間前」

カーテンの隙間から差し込む朝の光にくすぐられるように、進也はゆっくりとまぶたを開いた。

「やべえ。死ぬほど腹減った」

身体感覚が蘇ってくると同時に、進也の下腹部は腹を下した時とは違う痛みに被われていく。

「あー。飯、飯」

吐き気すらこみ上げてくる胃袋をなでつけながら進也は何とか布団を蹴り飛ばし散漫な勢いで起き上がり、縋り付くような格好で冷蔵庫の扉を開いた。

幸いなことに、八時間前に賞味期限が切れた弁当は健在で、冷え切った具材からは特に嫌な匂いも上ってこない。これで腹をこわしたら、うちのコンビニの管理不行き届きで保健所が入るな、と思いつつそれを乱暴に電子レンジに入れると適当にダイアルをひねってスイッチを入れた。

その間に彼はヤカンに水を入れ、それを火にかけた。茶葉なんて高価なものは彼の部屋にはない。飲み口がひび割れた湯飲み、文字通りの湯を注ぎ込みそれを胃袋に流し込むだけだ。

水の量は少量で、火力最大で暖められた水は電子レンジの終了合図が響く頃には立派な白湯となっている。乱暴に扱っているせいか、所々へこんでしまっただけの悪いヤカンを見てそろそろ新調するかと考えながら進也は少しばかり量の多い朝食をとった。

昨日は休日で、今日は平日だ。今朝はやたらと体力を消耗するレースもないだろうと当たりをつけ、少しホッとしながらものも数分で平らげてしまった弁当の残骸をゴミ袋に放り込む。

「……今日は、ゴミ出しだったな。」

冷蔵庫の扉に貼り付けておいたゴミ収集の予定表を半月ぶりに眺め、部屋の隅で小さな山を作っているゴミ袋の群れに目をやった。

「そろそろださねえとやべえか。分別は……面倒くせえ」

中身の大半をプラスチック容器とコンビニの割り箸で占められている袋の口を適当な紐で結びつけると、サンタクロースよろしく背中に抱え込み、まだ寝間着のままサンダルを引っかけるとドアを開け朝の街へと身を躍らせる。

「こうして俺の日常は何の面白みもなく、ゴミ袋の山と一緒に始まるのでした……っ」

見上げるとすがすがしいほどに晴れ渡った青空にさんさんと照りつける太陽が、彼の住まう築何十年にもなるボロアパートを照らしつけていた。

冬の晴れの朝は酷く空気が冷たい。外套も引っかけずに外に出てしまったことを若干後悔しながら、彼は白く吐き出される息で遊びながらアパートの前に設置されたゴミ出し場に足を運んだ。

しかし、あれは夢だったのだろうかと進也は夕べのことを思い返していた。

起きがけで徐々に覚醒していくその脳裏には昨日の夜、暗がりに沈む四つ辻の少女の姿がありありと思い浮んでいく。あの少女はいったい何者だったのだろうか。その姿形にはあまりにも似つかわしくない、神秘的なほどの妖艶なその雰囲気はまるでそれが人間ではないようにも彼には感じられた。

そして、あれはあそこに立って彼を見つめ、そして嘲るような笑みを彼に投げかけた。

「……ブアックション……！」

道行くものが居れば何事かと振り向くほどの、見事としか言いようのないクシャミをぶちまけると、進也は、

「あー、さむ……。この格好はきついわ」

といい、背負っていたゴミ袋を乱暴にゴミ置き場に投げ捨てると腕を組んで軽く両肘を擦りながら早足で部屋へと戻った。

朝が早いのは慣れたし、食事や衣服を自分で用意するのも慣れた。この生活を始めたばかりの時はどうなることかと思っていたが、進也は自分の順応性が思いの外高いことに少しだけ驚いた一年だった。

「仕事がすんなり決まったのもラッキーだったし、ボロいけど安いアパートが近くにあるのもラッキーだった。まあ、悪くねえな。この生活も」

部屋を出る時に予想していたように、今日は昨日のような草レースを展開させることはなさそうだ。進也は安堵のため息をつくと、昨日の酷使で少しゆるんでしまったチェーンの調子を見ながらゆっくりとペダルを踏み込んだ。

進也の趣味は既に言わずとも知れた自転車いじりだ。そのため、通勤にはわざと遠回りするような道が選ばれている。通勤の風景は変わり映えしない閑静な住宅街だったが、そこを抜けた先にある川には桜並木があり春になると桃色の自然トンネルで川辺が華やかな景色に彩られる。初夏には青々とした葉桜、雪の降る日には白い化粧をした枯れ木が、秋にはススキ野原が一面を彩る場所となっている。

以前職場の花見に誘われた時、その見事な景色に心を奪われたこともあった。

「ああ、大丈夫だ」

進也は呟いた。誰もいない空の向こうを目指して、しっかりとした視線でそう告げた。

「俺は、何とかやっているよ」

それは今はこの地上には居ない両親に対しての言葉だったのだろうか。川を横切る小さな橋の真ん中で止まった進也は澄み切った青い空に消えていく霧立つ白い吐息を目で追いながら、既に遠くなりつつある記憶を心の隅にしまい込むように深く息を吸い込んだ。

一年前のあの日、両親が死んだ。何の劇的な運命でもなく、ただ

の交通事故だった。

進也がさんざん苦勞して受験戦争をくぐり抜け、都内の有名私立高校に入学して半年以上立った時のことだった。今彼が乗っている自転車は、父親がその時の祝いにと海外の有名ブランドから取り寄せたレーサー仕様のものだ。

それは、父親が勤め先の職場で課長に昇進が決まった祝いの小旅行の途中だった。進也はその日、学校の模擬試験があり一緒に行けなかったことを覚えている。両親はとも夫婦むつまじく、進也と一緒にいけないことを残念がっていたが、反面久しぶりの夫婦水入らずの旅行だと言って喜んでくれた。

その日は雨が降っていた。雪に変わるかもしれないとテレビは予想していた。

雪の露天風呂なら風流だろうなと父親は笑っていた。もちろん、混浴でね。と母親も笑っていた。弟妹が増えるのなら事前に相談してくれと進也も冗談を言いつつ笑っていた。

お土産は何がいい、という母の言葉に、進也は温泉まんじゅうと答え、父親にもっと面白いものを頼めと茶化されていた。

順風満帆だったと思う。この際、弟妹の一人や二人ぐらい増えても誰も咎めるどころか祝福してもらえると、本気でそう思っていた。だから、試験中に青い顔で駆け込んできた学年主任が、進也の名前を呼んだ時、彼はいったい何のことか想像することさえできなかった。

「それから、あつという間だったな」

事故地から最寄りの病院で両親の亡骸を確認し、近所の知り合いの助力で葬儀を行った。まるで実感がわかなかった。涙も流れなかった。

両親の遺体が入れた簡素な棺が、火葬場のボイラー室へ運ばれ、その扉が閉じられた時彼はようやく全てを理解した。

涙が止まらなかった。

両親の死亡保険が入り、相続放棄をして家や車のローンを破棄し

た。今でももらった保険には手をつけていないし、その金額を確かめたこともない。

両親の命が無機質な金の価値に置き換わるその現実を見たくなかったからだ。両親が立てた学資保険も預金も気がつけば誰かの手に渡ってしまっていた。

進也を知るものは、彼の不幸に同情した。しかし、彼は自分の不幸を嘆かなかった。

『誰も彼もが勝手に俺を不幸な人間と呼ぶ。そんなものはもうまっぴらだ』

そして、彼はそれまでの全てを捨てた。高校を止め、生まれ育った家を立ち退き、住んでいた街を離れ生きていくことを決意した。彼は後悔はしていない、それが間違いではなかったと今はそう思える。

進也は流れゆく川に視線を落とし、自分はそこに流れる人間のようにはならないと決意を新たにした。

「ちよつと待て！」

思わずハンドルを取り落とし、彼は橋の欄干に身を乗り出しよくよく目をこらした。

「今、俺は何を見た。あんなもんは目の錯覚だよな」

できることならそうあって欲しいと願いつつ、視線を揺らしそれを探した。

穏やかな川の流れに身を寄せるのは、列をなす水鳥の親子、そしてどこからか流れ着いた朽ち果てた流木。そして、彼は見つけた。その流れに抵抗することなくただ流されていくばかりの人の影を。

「身投げか！？ 馬鹿野郎が！」

よくよく確かめればそれはまだ大人になりきれしていない少女のようだった。

進也は倒れてしまった自転車をひっつかむと、ゆるんだチェーンを気にすることなくそのまま川の土手を滑り降りた。

川岸に降り立ち、進也はまともにブレーキもかけずに自転車から

飛び降りると横を流れる少女と併走しながら服を脱ぎ捨て下着の一枚になると、何の躊躇もなく川へと飛び込んだ。

頭からもろに水中に進入した彼は今が冬であることを完全に忘れて去っていた。

寒空の寒中水泳。しかもまともな準備運動もせずに飛び込んだ彼の皮膚を、水の冷針が無遠慮に突き立てる。

水に溶けていく体温を何とか補おうと心臓がフル加速で早鐘を打ち込み、体中の筋肉がこれ以上の消失は無謀だと痙攣を起こし始めた。

それでも何とか水から這いだし首から先を空気の元にさらけ出した彼は必至になって目的のものを探す。

それは幸いなことにすぐ側にあった。神の祝福か悪戯か、少女の伸びきった腕が川の中央にある大きな岩に引っかかりそれ以上の進行を阻んでいたのだ。

「待つてろ。すぐに助ける」

ノイズがかかり始めた意識をなにがしかの義務感で打ち払いながら、進也は懸命に手足をばたつかせ、川の流れに飲まれつつ逆らいつつ少女の腕をとった。

更に幸いなことに少女は完全に意識を失っており、進也の救出を妨げることはなかった。

彼は少女の両脇に腕を回し、背後に回ってゆっくりとそれを引き込むように流されていく。

橋の下を越え、今にもシャットダウンしそうな意識を振るい、川辺に生える草木や木のツタの一部を何とかつかみ取り、進也はようやく少女と共に川辺へとたどり着いた。

白み始めた視界で土手道を仰いでも、そこを通るものはいない。

進也は少女の胸に耳を当て、口元を確かめた。

微弱な心音は更に小さくなっていつているような気がした。

口元と何度確かめても、彼女が呼吸をしている様子はない。身体が氷のように冷たい。

もう死んでいるのではないか、と彼は思うが、少なくともさつきまでは動いていた心臓を思い、今がその瀬戸際なのだと実感した。「落ち着け、落ち着けよ、進也。人の命がかかってんだ。恥ずかしいとか言うなよ」

震え上がる身体を擦り合わせながら何度か筋肉を動かし、それでも震える手をしかりつけながら進也は少女の衣服に手をかけた。

濡れた衣服は空気より体温を奪っていく。既に氷のように冷たい少女の身体を思うとすぐに毛布をかけてやりたくなるが、今は息を吹き返す方が重要だ。

リボンがかけられたブラウスのボタンを上から一つ一つ外していき、その下にある薄手の肌着を強引に引きちぎり、スカートを細い両足から引き抜いた。

あらわになった白い上下の下着に一瞬ドキッとさせられたが、進也は大げさに頭を振って人工呼吸の準備に入った。

「心音停止、呼吸停止。」

そして進也は少女の肩を叩きながら何度か声をかけるが、少女がそれに何らかの反応を返す様子はなかった。

「生命反応、無し」

中学生の保健体育の実習で教えられ、今の職場に入る時にも確認した方法を一つ一つこなしながら進也は少女のあごを引っ張り、頭を下に押さえた。

「気道確保。鼻孔閉鎖」

いよいよここまで来てしまったと進也は半ば諦めるように、一度だけ深呼吸をした。

そして、胸を張り出来る限り肺に空気をため込み、少女の唇に自らの唇を押しつけると、おそらく適切と思われるペースで息を吹き込み始める。

まるで死体と口づけを交わすような感触だった。その冷たさに思わずぞっとしつつも、彼はそれを二回繰り返す。

正確には何回するべきなのか忘れてしまったし、吹き込む息の量

も多すぎたかもしれない。それでもかまわずに少女の唇から口を離し今度は彼女の胸に手を置いた。鳩尾の拳一つ上、あばら骨の合わさる末尾を狙い、指先は天井を向け手のひらを重ね、彼はあばら骨が折れることも辞さずに思いっきり自分自身の体重をかけて押し込んだ。小振りなりにも柔らかな乳房が手に引つかかって少し邪魔に感じた。

それを七回繰り返し、再度肺へ息を送り込む。

「酸欠になりそうだ」

自分の唾液でべたつく唇を何度か拭いながら彼はそれを繰り返した。

できることなら誰か気がついてくれ。どうせなら救急車を呼んでくれると尚いい。

もう一〇回は繰り返しただろうか、意識が飛びそうになる度に頬を打ち付け正気を保とうとする進也の目に、少女の咳込みが聞こえた。

「おい！大丈夫か？」

少女は咳き込みながら口から水を吐き出し、

「ふうううー」

と一度大きく息を吐き出し、そのまま動かなくなった。

進也は慌てて口元に耳をやるが、少女の吐息は眠っている人間のそれであると分かり、彼も安堵のため息をついた。

念のため手首を調べ脈をとるが、それも正常になりつつある。

「あー。ダメだ、今度は俺が死ぬ」

近くにある勤め先のコンビニに足を運ぼうとした進也は全く力の入らない身体に負け、情けなくもその場にしゃがみ込んでしまった。「なあ、あんた。気がついててもまだ俺が倒れたまんまだったら、今度は俺に人工呼吸をしてくれよな」

もつとも起きた隣で下着一枚の男とが倒れてたらめちゃくちゃビビルだろうな、と彼は薄れ行く意識の中でそう思いつつ、崩れ去る姿勢のままに無意識の世界へと落ち込んでいった。

進也が気を失っていたのはものの一〇分程度のことだったらしい。あの後、朝の空気を吸いに店前に出ていたコンビニの店長が川辺で倒れていた進也を見つけて大あわてで運び込んだと目覚めた進也は聞かされた。

「お手柄だったけど、無茶にも程があるよ」

とりあえず落ち着いた進也はそういう店長からこつてりと説教を食らった。幸いなことに少女には外傷はなく、ただ冷水を浴びたショックで意識を失っただけのことらしい。

進也の応急処置が功を奏し、彼の側で眠る彼女の頬には僅かに赤みが差し始めている。

「ところで、彼女、知り合いなの？」

店長の言葉に、進也は初対面だとは言えなかった。応急処置をしている時には必死で相手の顔を確かめることなど出来なかったが、よくよく見ると、どうも見覚えがあるような気がしてならなかったのだ。

その表情の造形には特徴らしい特徴は見あたらないが、その肩から流れる見事なまでの緑の黒髪は彼の記憶にある一人の少女と一致していた。

それに、彼女が先ほどまで身に付けていた制服は、進也が以前通っていた学校の生徒であることを語りかける。

次第にはつきりと浮かんでくるイメージをたぐり寄せ、彼は何か思い出そうと意識を振り絞った。

学校、教室。それに、馬鹿な悪友にやかましいクラスの女達。

その隅にいていつもそれを遠い表情で眺めるだけの少女が確かに彼の記憶の隅にこびりついていた。教室でもまともに話す奴も居ない、誰かが話しかけてもどこかおびえたような表情でそれを見上げるだけで自分からは何の行動も起こそうとせず、正直なところ気にくわないとも思っていた少女の面影が、小さな寝息を上げながら時

折辛そうな声を上げる目の前の少女と重なっていく。

「そうだ、ときのかみ朱鷺守七葉。ななはようやく思い出せた」

普段はあまり使うことのない頭を弛緩させ、進也は「ふう」と一息ついて、また怪訝な表情を浮かべた。

彼の記憶が正しければ、確かこの少女は古くから続く旧家の武家屋敷のお嬢様のはずだった。

「知り合いだったんだね」

「いえ、知り合いと言うほどの知り合いではないです。話をしたこともありませんし」

「救急車はいつになつたら来るんですか？」

進也はいらだたしげに店長に聞く。

「それがね、今朝は急患が多いから到着はかなり後になるらしいんだよ」

「何でも今朝の早くに爆発事件があつたらしくて、この川の上流だったかな」

「案外、こいつもそれに巻き込まれたのかもしれないね」

「もう待つては居られません。俺がチャリで運びます。病院に連絡してくれませんか？」

「そうだね。お願いできるかな」

「ええ。届けたらずぐ戻りますんで」

「いいよ。君も川に飛び込んだんだから見てもらいなさい。今日は有給って事にしておくからさ」

「有給の出るバイトってどれだけ待遇いいんですか」

「今日だけ、内緒だよ」

「ありがとうございます」

進也は七葉を毛布にくるんだまま荷台に載せ、ロープで自分自身とをくくりつけ、ゆっくり慎重に走っていった。

ようやく一息ついたなと、進也は廊下に設えられたソファに深く腰を下ろした。

バイト先から二〇分ほどにある私営の病院に到着した進也は外来患者を押しつけて受付に殴り込んだ。

受付の事務員は当初目を回していたが、彼が抱える少女が並ならない容態だと気づき、すぐに医者をあてがってくれた。

七葉が川に落ち、一時心臓と呼吸が停止したと聞かされた医者は、急いで酸素吸入とMRIをかけたが、どうやら応急処置が適切だったこともあり、脳には大した傷害は見受けられなかったらしい。

「不幸中の幸いか。まあ、命あつての物種だしな」

不幸とか幸いとかという言葉に敏感になっている進也はその言葉に眉をひそめたが、先ほど会わせてもらった七葉の寝姿をみて安心を覚えた。

「さてと、これからどうすっかな」

進也も軽い問診を受けたが、殆ど身体には異常がないと診断された。

「あとは、医者に任せときゃいいわけだが」

進也が先ほどから悩んでいるのはその一点だった。自分がここにいるのも七葉の治療には何の役にも立たない。

だったら、さっさと引き上げてバイトに戻るべきだと進也は思うが、どうもさつきから足が動かない。

「結局、心配なんだな、あいつが」

進也はそう呟くと、面会謝絶の札のかけられた病室に視線を移した。

「行くか……」

進也は勢いをつけてソファから立ち上がり、病室の扉を一瞥すると立ち去ろうとした。

ここは随分と冷える。支払いを済ませてどこか暖かい場所に行こう。

進也は踵を返し、彼方に伸びる廊下を見やった。

距離が開くにつれ幅の狭まる壁床天井の平面は彼方に行けば一点へと収束していき、そこに立つ人間でさえもただの点に集約される。

一人の男が立っていた。

カツン、カツンと硬い足跡を響かせながらそれは次第に進也の下へと歩み寄ってくる。

「君がお嬢様を助けた者か」

進也の視界を覆うほど接近したところで、彼はただ一言そう聞いた。まるで問いたただすかのようなその物言いに進也は少し腹を立てたが、一応答えを返すこととした。

「ああ。そうだ。あんたは？」

相手が礼を欠いているならこつちも礼を尽くす必要はないと進也はこれ見よがしに不機嫌な表情で口をとがらせる。

「七葉お嬢様の使いの者だ。病室はここか？」

平均的な成人男性より少し身長が低い進也から見れば、その男は見上げるほどに背が高い、そしてその体格からして随分鍛えていることが伺える。

普段から自転車を走らせている進也も、ある程度まとまった肉付きをしているが、その彼でさえ華奢に見えるほど彼は恵まれた体躯を持っているようだった。

「ああそうだ。面会謝絶だぜ」

「問題ない。既に話は通している」

「ああ、そうかよ」

さすが朱鷺守の家。つい一時間前にここに来たばかりだということに、こんなに早く迎えが来るとは驚きだった。

しかし、進也は疑問に思った。朱鷺守の対応の早さではない、何故こんな男が病院にはいることが出来たのか。

「なあ、あんた。そんなもん持って病院に来るってのはちょっと無

理があるんじゃないのか？」

いや、病院だけの話ではない。そんなものを腰に差し置いては街中を歩いただけで警察のお世話になってしまっただろう。

進也は、彼の腰に差されている刀を差した。

「貴様、これが分かるのか？」

男は驚いた表情で進也を見る、しかし、その視界は進也が突然に開いた病室の扉に遮られ続く衝撃に彼は姿勢を崩した。

「朱鷺守！」

突然開いた扉に、中にいた七葉は驚いて立ち上がった。どうやら目を覚ましていたようだ。自分が何故こんな所にいるのか分からず、ただ茫然としていたところに進也が入ってきたことには大層驚いただろう。

出来ることなら状況を説明してから連れ出すべきだろうし、朱鷺守の使いの者と一度顔を合わせるべきでもあるが、進也はそのどちらもしなかった。

理由はあの男が持つ違和感だけだった。しかし、ここで七葉を奴に渡すのは後々取り返しのつかないことが起こりそうな予感がしていた。

「え？ まさか、坂上君？」

どうやら七葉は進也のことを覚えていたらしい。

進也は急いで病室の扉を閉め、鍵をかけた。相手が刀を持っているのであればこれもいつまで持つのか分からなかったが、とにかく少しでも時間が必要だった。

「お前の使いで、刀を持った男が来ている。あれはお前を引き渡してもいいやつか？」

質問をしながらも進也は、病室を見回すと、扉の反対側の窓から外を見た。

「刀を持った人……」

七葉の言葉を遮るように扉が荒々しく叩かれた。

「七葉お嬢様、お迎えに上がりました。ここを開けてください！」

病室に響き渡る打突音と共に聞こえる男の声に七葉は声をのんだ。
「だめ、捕まりたくない」

七葉はそういうと裸足のまま進也の下へかけより、彼の手を取った。

「お願い、ここから連れ出して」

進也はそれに深く頷くと、窓を開きその下を覗き込んだ。病室は二階に位置していたが足場はあった。下の階の端に儲けられた事務棟の一階の天井部が二階の足場となって続いている。

飾り気のない白いカソツクのような一枚形成のワンピースを着た七葉にはこの道は辛いかもしいないが、逃げる道はここしかない。

「いけるか？」

進也は七葉の目を見た。

「……うん。がんばる」

七葉はその視線からおびえるように目を外すと小さく頷いた。

「上等！」

進也はそう雄叫びを上げると彼女の手を取って窓から身を躍らせた。

第三章 六十五時間前

「六十五時間前」

「これは人混みというよりは、人の海だな」

ベルディナ・アーク・ブルーネスが通りを埋め尽くす雑踏と道路を埋め尽くす車の群れを前にため息をつく。

「そうですね。正直、うんざりしますわ」

側に立つルーディアもそれに頷く。

その二人の容姿は国際都市である東京においても異彩を放っている。片方は背が低いにせよ一般的な白人男性の青年風だが、彼が身に纏う灰色のローブは現代人の目から見れば異質である。

その隣のルーディアも黒に近い蒼髪に透き通るような白い肌を、それとは全く逆の漆黒のドレスで覆い尽くしている。

他人に無関心であるはずの通行人もその二人の姿を見てしまえば嫌がおうにも振り向いてしまっている様子だ。

「マスター、わたくし達注目の的ですよ」

ルーディアはその無遠慮な視線に対しても笑顔を浮かべ、時折手を振っては道行く人々を困惑させている。

「だろうな。時代を間違えた痛い奴らだって顔だ」

ベルディナはクスクスと笑ってその状況を楽しんでいるルーディアの手を引き歩き出した。

「もう行くんですの？」

ベルディナとは歩幅の違うルーディアは少し小走り気味でそれに追いつこうとする。

「予定まではまだ時間がある。先に食事だ」

「わたくし、チョコレートパフェが食べたいですわ」

「勝手にしな」

そう言い放つとベルディナは歩調を変えずどんどん人並みをかき

分けていく。

「ちよつと、マスター。もう少しゆっくり歩いてくださいまし」
時々足がもつれて肩が通行人に接触しそうになるルーディアはそういうが、ベルディナはそれを無視して歩き続ける。

「もう、ご無体なマスターですこと。でも、そういう強引なところは嫌いではありませんわ」

ベルディナは呆れた表情で歩調をゆるめる。

「まったく、何でこんな使い魔を使役することになったんだか」

「もちろん、マスターがそうお望みになったからですわ」

「まったく、死にたくなるぜ」

二人はそのまま近くのイタリア料理店へと足を運ぶ。昼食時を少し外れていたが、それでも店内は仕事休みのOLや会社員が紅茶や珈琲を片手に談笑をしている。

席に案内された二人はメニューに目を通し給仕よ呼びつけた。

「このランチコースを。食前酒にキールロワイヤルを、食後はダイジリンで頼む。ルーディア、お前は？」

「マスターと同じものを。わたくしはアッサムをお願いしますわ。デザートにこのチョコレートパフェをお願いしてもよろしいですか？」

「申し訳ございません。お嬢様にお酒はちよつと……」

「でしたらシャーリーテンプルを。これは問題ないとおもいましたよ」

「かしこまりました」

「相変わらずこの国の人間は融通が利きませんのね」

「それだけ勤勉なことだ。賄賂を取らない警察官といい、ここの国民性は気に入っているがな」

「私はダメですわ。見かけだけで判断されるのは不快ですのー！」

ルーディアはお嬢様と呼ばれたことに不満なのか、最初に運ばれ

てきた水に浮かぶ氷をいじりながらいらだたしげに足をぶらつかせた。

「その姿で生まれたことを呪うんだな」

「あら、私をこの姿にしたのはマスターですよ」

「そうなのか？ てつきりお前の趣味かと思っていたが」

「この服は私の趣味ですわ。最も、変えようと思えば変えられるのですけど」

「結局お前の趣味なんじゃねえか」

食前酒と共にオードブルが運ばれてきた。

平たい中皿の上には、オリーブオイルをベースとしたドレッシングのマグロのカルパッチョ、穴子のフリッターが盛りつけられている。

味は日本人好みで薄味に調えられているが、その繊細な味わいは二人の舌を大いに満足させた。続くパスタも、白ワインで仕上げられた鴨肉のラグーソースが絶妙だった。

ランチのコースであるため肉料理はつけられていないが、昼食としてはほどよい分量だった。

「相変わらずこの国の飯はいいな。アメリカやイギリスのジャンクフードに比べるのは失礼かもしれんが」

つい十数時間前までいたアメリカの雑な料理に慣れていた舌には、例えば大衆レストランの料理であっても宮廷料理に思える。

「そうですね。わたくし、ハンバーガーは好みではありませんでしたわ」

使い魔のくせに舌が肥えやがってと毒づくが、紅茶と一緒に運ばれてきたパフェをほおばる彼女を見るとそれもどうでも良くなってしまう。

椅子に座った自分の背丈ほどにもあるグラスを小さなスプーンで必死になってつつくルーディアを見るベルディナの目は、まるでやんちゃな娘をもつ父親のものだった。

周りを見てみると、店内にいる何人かの客や給仕もそんなルーデ

イアを微笑ましげに見守っている様子だった。

「（まあ、もつとも、ルーディアは俺たちの何十倍の時を生きているんだけどな）」

ルーディアが受肉してまだ一〇年ほどしか立っていないが、それまでの彼女は五〇〇年間書庫で眠らされていた魔導書だった。それが持つ知識は、例え二〇〇年を超える人生を持つベルディナであってもとうてい及び付かないものであるといえる。

しかし、書庫で得られるものは知識だけであり、それは経験を伴うことはない。ルーディアがこんなにも世界に興味を示すのは五〇〇年間鬱積した経験欲のなせる技なのだろうとベルディナは考えた。と、突然ベルディナの懐が震え始めた。ベルディナは、おつと、と言ってそのふるえの元凶である携帯電話を取り出すと送信元を確かめ通話ボタンを押した。

「俺だ。ようやく連絡か、待ちくたびれたぜ」

「ああ、問題なく入国できた。荷物も後日届くはずだ」

「分かってるよ、あんたには感謝してる。正規ルートではどうやっても持ち込めない代りだからな」

「今は食事をとっている。後二、三時間でそちらに到着できるはずだ」

「分かった。話はその時に」

「先方からですか？」

「ああ、どうやら食事を用意して待っていてくれたらしい」

「それは、悪いことをしましたわね」

「いいさ。別に会食が目的じゃねえんだし」

「行きますの？」

「ああ。支払いを済ませてくる」

「分かりましたわ」

ベルディナは席を立ちレジスターへ向かう。ルーディアは最後までとって置いたバナナを一口で頬張るとそのままベルディナを追っ

た。

ベルデイナの目的地である朱鷺守の屋敷は、都内の中心から電車を幾つか乗り継いで二時間ほどかかる位置にあった。

朱鷺守は古くから続く名門の家であり、現代の日本においても政治や経済に大きな影響を持つ名家の一つだ。江戸は武家、明治からは貴族の名門としてこの国を影ながら支えてきた歴史がある。

彼らが守ってきたもの、それは日本古来の伝統魔術だった。しかし、明治に入り西欧文化や技術が日本へともたらされるに辺り、近代西洋魔術もが日本へと侵入を果たそうとしたことは避けられない運命だったのかもしれない。

日本古来の伝統魔術、陰陽道、神道、仏道、土着の精霊信仰に代表される魔術はその立ち位置を危うくする事となった。近代思想と共に発展した近代西洋魔術は、神を退けるほどの合理性とはつきりとした体系を持つ技術だった。

流入する近代西洋魔術に対抗して、日本伝統魔術を守り続けるにはどうすればよいか。

その当時に朱鷺守はそれを真剣に考えた唯一の魔術家だった。

彼らは西洋魔術を学び、多くの若者を欧米へと留学させ、ついには日本伝統魔術と近代西洋魔術を融合させた日本近代魔術を生み出すことに成功した。

都市の郊外にあっても人の往来の多い地域に立てられたその屋敷には、俗世とは切り離されたかのような静寂が覆い尽くす。

その屋敷の一角に位置する隠居の茶室には何者の侵入も許さないような静謐さが漂い、見るものが見たのであればその区画には強い『人払い』の魔術が刻まれていることが分かるだろう。

その茶室の主、朱鷺守総弦は老眼鏡を外し、手に持っていた毛筆を硯において一息ついた。茶室造りの隠居には書をたしなむ机とは

別の所に茶の湯の一式がそろえられている。

既に一線を退き、隠遁生活を送る彼にとってこの束の間の点茶が何よりもの楽しみになっている。

「お客様のご到着です」

障子張りの茶室の向こうから侍従の声が届いた。

「通せ」

総弦はそう一言伝えた。

起伏のない今の生活において、点茶以上に楽しみに思うことがもう一つある。それは古い友人が遠方より訪ねてきた時だった。

ウグイス
鶯張りの廊下のきしむと共に二人の人物が茶室へ向かってきている。

障子戸を引く静かな音共に、庭に設えられた鹿威しの簡素な響きが耳をなでつける。

「すっかり隠居をしているようだな。総弦。久しぶりにあえて嬉しい」

久しく合う友人はどうやらまるで変わっていないらしい。総弦は若かりし頃の自分を思い出すように微笑むと、客人を迎えるため面を上げた。

「私も嬉しいよ、ベルディナ。腰が痛くてね、座ったままで失礼する」

ベルディナはかまわんと言つと、ルーディアをつれて部屋に入り近くに敷いてあった座布団にあぐらをかいた。

「わたくしはお初にお目にかかる事になりますわね」

ルーディアはそう微笑むと、総弦の前に一歩足を踏み出した。

「このお嬢さんは？君の娘さんか何かかね？」

ベルディナは笑うと、

「そう思うたぜ」

と言つてルーディアを紹介した。

「これはルーディア。一〇年前から俺の使い魔をやっている」

「以後お見知りおきを願ひいたしますわ、朱鷺守の老師様」

ルーディアはスカートの裾をちょこんとつまみ上げると、恭しく礼をした。

「これは、ご丁寧に。そうですか、人の姿をした使い魔とは初めてお会いしますな」

総弦もそれに答え、正座のまま手を置につけると深く面を下げた。
「私は朱鷺守総弦と申します。今は隠居の身の上ですが、ベルディナ大導師殿とは幼少の頃から親しくしていただいております」

そんな二人をみて、ヤレヤレと肩をすくめるベルディナは一通りの挨拶が終わったところを見計らって本題に移ることとした。

「それで？俺がここに呼ばれた理由は何だ？それも朱鷺守の当主ではなく隠居中のお前に。しかも、裏口から通されたって事は当主にも秘密の話題だと邪推したが」

総弦は、少し口を閉じ、棗に蓄えられた緑の粉末を茶杓にとるとそれを茶碗に移し、湯を入れ茶筌でそれを攪拌させる。

静かな密室に響く茶筌の囁きはその静寂をいつそう際立たせるようにベルディナには感じられた。

「さて、どこから話したのか」

点てられた茶の湯をベルディナの前に置きながら、総弦は眉をひそめた。

「まずは理由だ。俺が呼ばれた理由。前置きは言い。端的に頼む」
ベルディナは軽く礼をして茶碗を取り上げ、内側に何度か回すと軽く音を立ててそれを口に含んだ。

物珍しそうにそれを見るルーディアにも総弦は同じものを差し出した。ルーディアもベルディナの真似をして茶の湯を口に含むが、その独特に苦みに少し眉をひそめた。

「呼び出した理由。それは、私の孫娘のことだ」

総弦は、自分の分の薄茶も点てながらゆっくりとかみ砕くように話し始めた。

その話が終わる頃にはそろそろ空も夕日の赤みが差し、紫がかった雲がまるでねぐらを探す渡り鳥のように風に流されていく頃だっ

た。

ベルディナは側に置かれた小さな火鉢に手を置きながら、総弦から話された言葉を反芻しながら少し視線を下げた。

一時間ほど前に無口な侍従が運んできた料理を口にしながらベルディナはその話を聞いていた。

ルーディアは話に飽きてしまったのか、何か興味を引くものを見つけたのか料理が運ばれてくる前にどこかに行ってしまうここには居ない。

総弦の孫娘、朱鷺守七葉の名が出された時点で総弦が何を話そうとしていたのかは想像がついていたが、実際にその通りのことを伝えられては何も感じないわけにも行かない。

「つまり、それは。お前の孫娘、朱鷺守七葉を極秘の内に連れ出せ、ということか」

空になった陶器の碗を手でもてあそびながらベルディナは呟いた。

「ありていに言ってしまえばその通りだ。」

料理に殆ど手をつけず、一緒に運ばれてきた酒を傾けながら総弦は答えた。

「だが、それでは国際魔法管理機関は朱鷺守と、日本魔術同盟と敵対する事になる。それだけではない、下手をすれば英国魔術協会と米国魔術連盟さえも敵に回すことになりうる。お前の孫娘にはそれだけの価値があると言っのか。それにお前の孫娘は……」

「魔術が使えない。やはり知っていたのだな。ならば、その先にあるものは何か。既に見当がついているのではないか？」

ベルディナの話を遮り、総弦はそういうと猪口を置いた。

「ああ、見当はついている。だが、そうになると俺では無理だ。管理機関はその手のことには介入できない。英国魔術協会も米国魔術連盟も基本的には無干渉を貫いている」

「だからこそ、君なのだ」

「本気でそういつているのか？ 俺に世界の敵となれと？」

「身勝手なことを言っているのは重々承知している。だが、俺は七

葉がそういった政治的な材料にされるのを黙ってみてられんだ」

総弦はかなり酒に酔い始めている。先ほどまで自分を私と呼んでいた彼が、ここに来て昔の口調に戻ってしまったている。

それだけ本気と言うことか。とベルディナは考え、彼も進められるままに酒を口にした。

「富山の大吟醸か。ここまで来るとワインに似ているな」

よく冷やされた純米酒はベルディナの口の中で溶けて広がり、全体的に甘い風味を醸し出す。さっぱりとした飲み口の奥に広がる奥ゆかしさは、上質の米と澄み切った川の流れを想像させる。それでいてワインのような自己主張をせず、あくまで口に残る料理の風味と解け合い、互いの良さを引き立て合うように感じた。

「古い知り合いが送ってきた特上酒だ。俺でも滅多に飲めるものではない」

随分酔いが回ってしまったのか、総弦は「ふう……」と息を吐き出すと少しふらつく足取りで立ち上がり、茶室の障子を開いた。

夕暮れも近い澄み切った涼風が駆け抜け、火照る総弦の身体を気持ちよく冷やしていく。

「一晩だけ待ってくれ。それで答えを出す」

ベルディナは総弦に背を向けたままそう答えると、手酌で猪口に酒をつぎそれを一気に飲み干した。

「ありがとう。……私はそろそろ休むとするよ……」

「ああ、身体には気をつけるよ。もう、お互いに若くねえんだ」

「その容姿で若くないと言われても説得力が無いよ。では、君も飲み過ぎないようにな」

「お休み。総弦」

「お休み、ベルディナ」

障子戸は閉ざされ、束の間の静寂が訪れた。夏には虫の音が庭一派に広がるだろうが、冬になってはそれもなりを潜める。

鹿威しの水も今は止められ、水の流れる音もしない。

ベルディナは既にならなくなってしまった徳利を横向きに寝かせる

と、部屋の電灯を消したい衝動に駆られた。

「世界の敵になるか……何を今更。そんなこと一〇〇年以上も前に決意した事じゃねえか」

ベルディナは天井につり下げられた白熱灯の電源を落とし、暗闇へと自らも陥っていった。

第四章 六十二時間前

「八五時間前、東京都郊外、朱鷺守邸隠当主書斎」

朱鷺守総也はデスクに並ぶ書類を睨みながら片肘をついていた。「協会が動き始めたか。そろそろ動きを押さえつけるのも限界のようだな」

総也はクッションのよく効いた椅子の上で膝を組むと、どうしたものかと思案を始めた。

そんな折、彼の正面に備え付けられたドアをノックする音が聞こえた。総也は、一言「入れ」と言い、手元の書類を裏向けた。「失礼します」

総也の呼び声に簡素に答え、ドアの向こうから姿を見せたのはまだ幼さを残す若い女性だった。

「燈華か。何があった」

燈華と呼ばれた女性、天宮燈華は朱鷺守当主である総也の側近とも言える人物だった。いや、側近と言うよりは影の使用人と言ってもいいかもしれない。

ともかく、燈華が直接総也の書斎を訪れると言うことは、誰の耳にも入れることの出来ない何かを報告するためであるはずだった。「協会の人間が総弦様と会談を設けておられるようです」

噂をすると影が立つ。既に動きがあったことを捉えきれなかった総也は、「やっかいだな」と呟くと冷めてしまったお茶に口をつけた。

「会談の内容は？」

総也の苛立たしげな口調に眉の一つも動かさずに燈華は、

「七葉お嬢様のことについての様子です」

「七葉の？ まさか、協会があの子を捕縛しようとしても言うのではあるまいな」

彼の娘、朱鷺守七葉の名前が出た瞬間、総也はまるで取り乱したかのような声を上げた。

「そこまでは分かりません。しかし、おそろくは……」

「よい。お前に意見など聞いておらん」

「……申し訳ございません……」

総也は茶を飲み干すと、立ち上がり背後の窓から中庭を見下ろした。

「いかがいしましょう、御館様」

その表情に違わぬ感情の起伏無い淡泊な口調で燈華は直立して主の命令を待った。

「監視を続けよ。そして、御剣を呼べ。七葉はなんとしても守らねばならん」

僅かに取り乱した感情をなでつけながら、総也は毅然としてそう命令を下した。

「かしこまりました」

総也の口から七葉の言葉が出る度に、人目には分からないほど僅かに眉をひそめる燈華は、その命令を受け、総也の背中に向かって礼をすると静かに退出した。

「手遅れにならなければよいのだが」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9157f/>

逆神の深夜

2010年10月11日22時46分発行